夜霧ノ幻影殺人姫

ＯＲＣＡ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜霧ノ幻影殺人姫

【Ｎコード】
Ｎ２６３５Ｚ

【作者名】
ＯＲＣＡ

【あらすじ】
過去を変える術を得て、最愛の従者を取り戻そうする吸血鬼は、霧満ちる街で何を見るのか
――この作品は某サイトで私の書いた物の転載になります

零日目

人間はあまりにも脆すぎる。
【彼女】は時間を操る術を持っていた。

紅い館でメイドとして働き、主に絶対の服従を誓う完全完璧な従者。館の者全員から頼りにされ、その中で人間の【彼女】も笑っていた。

そんな時間が永遠に続くと、主レミリア・スカーレットは思っていた。幼かった紅月は、それを疑わなかった。

――ずっとお傍にいますよ。お嬢様……

いや、疑えなかったのだ。
【彼女】が、そう言ったから。

「嘘つき……」

年月は既に幾巡も巡り巡って、記憶すらもかすれていた。
博麗の巫女も何度も代わり、森に住んでいた魔法使いも姿を見なくなった。

空虚な時間は……いや、逆だ。
充実した日々だった時間は人間には長くとも、吸血鬼にはあまりに短い。

永遠と刹那の相違。

一生を永遠にも等しいと捉える人間と、人間の一生を刹那と捉える吸血鬼。
無情な時はどちらにも等しく訪れる。

「レミィ、少し良いかしら……」

図書館に住む友人、パチュリー・ノーレッジが部屋の扉を開けた。

館の住人は【彼女】を除いて誰一人変わっていない。パチュリーもまた、【彼女】が館を訪れるよりも前からここに住んでいた。

「何かしら」

長い年月ですっかり伸びた髪を払い、扉の前に立つ友人に歩み寄る。
何が永遠に紅い幼き月だろうか。

今となっては大人になったデーモンロード……紅くとも幼くはいられない。

「レミィ……貴女、運命と過去、いえ、世界のルールすらも無視してねじ曲げてしまう覚悟はある？」

「何を言っているの？　戯れ言なら今はよしてくれないかしら」

「簡潔に言うわ。死んだ人間をここに連れてくる術を完成させたのよ」

「――ッ！？」

紅い瞳が見開かれる。

喉の奥から短く吐息が漏れるのが分かった。

言葉が、呼吸が、視点が……全てが狂うような感覚がレミリアを襲う。

「でもね、それは世界のルールから外れる事なの。過去には、本当は干渉してはいけない」

「……なさい……」

「レミィ？」

「黙りなさいパチェ。ルールが何だと言うの？　そんなもの誰が決めたの？　神様？　だったら私には関係ないわ。悪魔は神のルールになんて従わない」

パチュリーが微笑のまま嘆息した。
少なからずパチュリーもこの返事を望んでいたのだろう。

「図書館に来なさい。準備はできているから」

その魔法は世界を構築する力を一時的に逆流させ、時間という概念を回帰させるというものだ。
無論、そんなものに巻き込まれれば人間でなくともタダでは済まない。

莫大なエネルギーの奔流に飲み込まれ、刹那の内にバラバラになってしまう。
吸血鬼の肉体を持ってして、無事な保障が無いのだ。

「怖気づいた？」

「まさか。運命すら私を殺せないのよ」

魔方陣の真ん中にレミリアが立っている。

陣は三重。

最も外側の陣は魔法の影響が周囲に及ばないようにする結界の役割を果たすと同時に、八雲紫のような存在に感付かれない為の保険を兼ねている。

二つ目は空間転移の魔方陣。
【彼女】の力の一部を感知し、その付近にレミリアを飛ばす為のもの。
そして最も内側にあるのが、時空回帰の魔方陣だ。

「ここから先、私はサポートしてあげられないわ……術の有効期間はおよそ三日間。
それまでに【彼女】にこちらへ来るのを望ませられれば成功。
想いが魔法回路を書き換えて安全に転移させる事が可能よ。例え失敗しても、帰りは安全よ。回帰と経過じゃ難易度が全然違うの」

「分かったわ」

レミリアは短くそれだけ言うと、大きく呼吸を整える。
時間の感覚すら忘れてしまう程に長かった。再び会える【彼女】を思い浮かべ、口元が笑みを作る。

「行くわよ」

刹那、陣に光が満ち、レミリアは姿を消した。

壱日目

街灯の薄明かりが、シルクの外気をぼんやりと照らしている。

身体中に走る激痛は、しかし夜気に当てられるにつれて薄れていく。

この様子だと、どうやら成功したらしい。

レミリアは辺りを見渡した。

「どこかしら……」

レンガ作りの建物が建ち並び、その間を縫うように淡い明かりが照らしている。

辺りには霧が立ち込め、へばりつくような湿気が肌を撫でる。

気持ち悪い。

純粋にそんな感想が彼女の口から漏れた。

「おかしいわね……」

パチュリーの話だと、あの魔法は過去へ回帰するもののはずだ。
しかし、レミリアの記憶にこんな街並みはない。

と、ならばここは幻想郷ではない？

「お嬢さん」

突如聞こえた声に振り返る。
見ればそれは、黒い外套を纏った人物だった。

顔が見えなくて、男女の判別はできない。
声から判断しようにも、口元を何かで覆っているのか、くぐもっていて分かり辛い。

――でもこの声、何処かで聞いた覚えが……

「こんな霧の夜に一人で出歩くなんて、命を捨てるようなモノですよ」

「あら、何故かしら？」

「夜霧に紛れて、殺人鬼が貴女を狙っているかもしれない」

「ご忠告ありがとう。でも大丈夫よ鬼には慣れてるわ」

何せ、自身も吸血鬼なのだから。
嘲笑にレミリアの口元が上がる。

「では、せめて気をつけてください。切り裂きジャックは女性ばかりを狙いますから」

「ええ、分かったわ」

外套の人物はレミリアの隣をすり抜けるようにすれ違う。
肩と肩の触れ合うかという距離で、一言。

「……ジャックが【彼女】ですから……」

「――え？」

慌てて振り返ると、そこに外套の人はいなかった。
まるで、あの小さな鬼の霧に包まれた気分だ。

「まあ良いわ。それより、日が昇る前に宿を探さないと……」

幸いにも今は月夜だ。
が、時間は等しく流れる。
残念ながら明けない夜はないのだ。

「こんばんは……お嬢さん」

刹那、背後から声が聞こえた。
同時に、激しい痛みが熱となってレミリアを貫く。

「蠱惑的な夜に貴女に出会えた事は、今宵私にとって最大の幸福ですわ」

聞き違えるはずもない。

「随分と情熱的なファーストコンタクトだこと……切り裂きジャックさん」

壊れたブリキ人形のように、ゆっくりと首を背後に向ける。

「お気に召したでしょうか？」

銀色の短い髪、赤い瞳、透き通るような白い肌。
否定する要素もない。
その顔は、紅魔館にてメイド長を務めていた女性。

十六夜咲夜そのものだった。

しかし、今の彼女はレミリアが見たこともないくらい愉しそうに、
そして醜く口元を歪ませている。
あの瀟洒な姿は、微塵も見られない。

「そうね……でも」

「！？」

レミリアが、服の下に隠した翼を大きく広げた。
背後からナイフを刺していたジャックは、その羽に強く叩かれる
事になり、思わず後ずさる。
霧の街に、紅い悪魔が翼を広げた。

「私をダンスに誘うなら、もう少しマナーを心得なさい」

振り返り、ジャックを正眼に据える。
黒いコートと黒いスカート、口にはタバコをくわえ、ナイフを持っているであろうその手はポケットに。

「吸血姫と踊るつもりはあるかしら？　殺人姫さん？」

「……この殺人姫、自からダンスを申込んで逃げるなんて無粋な真似はできませんわ」
スカートの両裾を摘み、まるで舞台役者のように礼をする。

――やっぱり咲夜だわ……

闇夜の下、ジャックの姿が消えた。
先ほどまでそこにいた余韻は霧に残るが、しかしそれすらすぐに掻き消える。

「……時間停止ね？」

「！？」

背後から振り下ろされたナイフが、ピタリと止まった。

ジャックの腕をレミリアが掴んだのだ。

――貴女の考える事なんて分かるわよ……

そのままレミリアは力任せにジャックを放る。

「素晴らしいですわ……強くて美しいお嬢さん。是非ともこの私にお名前をお聞かせ願いたいのですが」

「他人に名前を聞くなら、ご自分から名乗るのが礼儀でなくて？」

「不祥、この殺人姫。名前を持ち合わせていないものでして」

――知ってるわ。貴女の名前は私が付けたのだもの……

「これは失礼したわね。私はレミリア・スカーレット。とある館で長年主をしているわ」

断続的な痛みがレミリアを襲い続ける。

吸血鬼の、いや、あらゆる存在の弱点である心臓を鎖で絞められるような鈍痛だ。

過去に一度、咲夜を失った時と同じ。
しかし、レミリアはこの痛みの明確な名称を知らない。

「では、レミリアお嬢様ですね」

「貴様は私を、その名称で呼ぶな！」

怒声と共に、赤い覇気がレミリアから噴き上がった。
それは瞬く間に夜霧を、空気を、空を星を月を、紅く染め上げてゆく。

「あら……？」

不意にジャックが目許を拭う。
血液が、涙のように滴り落ちてゆく。

「貴女に名前をあげるわ。絶対的運命共同体として、このレミリア・スカーレットが貴女を命名する」

「なんで、なんで止まらないのよ！」

溢れる血の涙を、泣きじゃくる子供のように両手で拭い続けていた。

「――今宵から貴女は咲夜。十六夜咲夜よ！」

「あああああアアアァァアアア！」

その一言が決め手となった。

ジャック、いや咲夜は突然、ナイフを落として頭を抱えると、夜霧に、時間の感覚すら狂いそうなシルクの中へと駆けて行った。

しかしレミリアは追わない。

否、追えなかった。

「まさか……咲夜と同じ銀のナイフだったなんてね……」

翼のやや下、最初に咲夜に刺された場所から赤い染みが広がっている。

銀は聖なる金属。

悪魔やその眷族に対して有効な武器となる。
吸血鬼も、銀は弱点の一つだ。

――少し、格好付けすぎたかしらね……

出血が予想外に酷く、意識が朦朧としはじめた。

「駄目よ……こんな場所で倒れたら、朝になってしまうわ……」

しかし、体の自由が効かなくなってきたのが分かる。
次第に歩みは足を引き摺る形となり、地面を這う形に変わり、レミリアはやがて動けなくなった。

彼女を中心に血沼が広がり行く。
致命傷ではないが、回復には相応の時間を要するだろう。

「時間なんて……無いのに……」

意識が溶けるのは刹那だった。
冷たい地面に倒れ、レミリアはまどろみの誘惑に身を任せる。

霧の下、吸血鬼の姫は【彼女】の名前を呼ぶ。

「咲……夜……」

弐日目・昼

「目が覚めましたか？」

「ッ！　――え、ええ……」

息を飲む。

目が覚めた場所は室内、見知らぬ木の壁に囲まれた一室だ。

仄かな木の香りと、しかし人的な明かりに照らされた暗い部屋には、レミリアの他に後一人の人間がいる。

銀色のショートヘア、青を基調にしたメイド服、三つ編みを縛る緑のリボンと、その声音……殺人姫、いや彼女はまさに【十六夜咲夜】その者だった。

「良かった、昨日の夜に血まみれで倒れてる貴女を見たときは心臓が止まるかと思いましたよ」

柔らかい笑みを向けて、彼女は紅茶を注いでくれた。

――どういう事？

昨晩、レミリアに瀕死の重傷を負わせた殺人姫、彼女は間違いなく咲夜だ。
しかし、今レミリアの眼前に居る女性も咲夜にしか思えない。

「貴女、名前は？」

「すみません、記憶喪失という状態らしくって……お嬢様とみんなからはディーラーと呼ばれています」

――ディーラー……いやそれより、お嬢様？

ディーラーはレミリアの空いたカップを下げると、金属の盆に乗せる。

「ディーラー、吸血鬼さんは起きたかしら？」

部屋の扉が開き、小さな女の子が顔を見せた。

「あ、お嬢様」

「――――――ッ！」

再びレミリアは言葉を失った。
ディーラーがお嬢様と呼ぶ少女は、【自分】だった。
いや、正確には違う。
幼かった、咲夜や白黒の魔女、あの代の博麗の巫女と過ごしていた幼い月の、【レミリア・スカーレット】だ。

――パラレル……ワールド……

過去に一度、八雲紫から聞いた事がある。

世界には平行して存在する別の世界が存在する。

（そこには、ある存在に対応する存在が必ず存在するのよ）

聞いた時は意味が分からなかった。今だって、明確には理解できてない。
しかし、受け入れるしかないのだ。

咲夜だけではない、自分に出会ってしまったのだから。

「私はミルレア。貴女の名前は？」

「……レ……レミリア・スカーレットよ」

平静を装う。

ミルレアに翼は無い。服装も違えば、帽子も被っていない。

「ミルレア、貴女に妹はいるかしら？」

レミリアから質問されることを予期してなかったのか、ミルレアはキョトンとした顔を見せている。

言葉を失ったミルレアの代わりに、返答したのはディーラーだった。

「――――そう、いないのなら良いわ」

どうやら、世界はそこまで都合よくできてはいないらしい。

考えてみれば、ミルレアのこの家は門番を抱えるような屋敷には見えない。

喘息持ちで根暗な友人が根城にしてそうな図書館もあるとは思えない……だとすれば、このディーラーとミルレアの二人は偶然引き合わされた事になる。

――皮肉な運命め……【私】から【彼女】を奪えと言うの！

「……どうされました？　顔色が悪いようですが」

「……ありがとうディーラー。大丈夫、何でもないわ」

ディーラーの怪訝そうな表情は消えない。

「ねえ吸血鬼さん。貴女はどこから来たの？」

唐突な問い掛け。
ミルレアの語調に含まれる無邪気さは、昔の自身よりも妹のフランを彷彿とさせる。

ミルレアは爛々と瞳を輝かせ、レミリアを吸血鬼と呼ぶ。
その隣のディーラーは困ったような微笑を浮かべている。

そんな光景に、レミリアはまた心臓を握り潰されそうになる。
あまりに似ているのだ。
楽しかった紅魔館の日々に。

あの日々の自分たちに。

「私は……」

言おうとして、言葉が詰まる。
僅かに首を振り、レミリアはゆっくりと口を開いた。

「紅い館からやって来たのよ。切り裂きジャックさんって知り合いに会いに」

――さあ、どんな反応をする？

もはや、ディーラーとジャックが同一人物なのは疑う余地もない。

「レミリアさんは、切り裂きジャックのお知り合いなのですか？」

――え？

ディーラーのあまりに検討違いの反応に、レミリアの言葉が再び詰まる。

「でしたら、彼を止めてください。ミルレアお嬢様の御両親のためにも」

ミルレアの父親は警察官だったらしい。
母親は若くしてミルレアを出産し、裕福ではなくとも温かな家庭だった。

そんなある日、切り裂きジャックによる猟奇殺人の最初の被害者が現れた。
ミルレアの父親は、当然警察官としてジャックを追い始めた。

しかし、ジャックはこの町に立ち込める霧のように姿が見えない。
何一つ手掛かりを掴めないまま、被害者は増え続けて行った。

ある日、ミルレアが母親の手伝いでお使いに行った。
久々に父親が休みで、家族水入らずの時間を過ごしていたその日、帰ってきたミルレアの眼前に地獄が広がった。

血の海と化した家と、変わり果てた両親。
彼女が悲鳴を上げたのは、必然だった。

ディーラーがミルレアと出会ったのはその時だ。

「私は悲鳴を聞き付けてお嬢様の元へ向かいました」

これが、ディーラーの持つ最初の記憶だそうだ。

ディーラーは何故自分がそこに居合わせ、何が起きたのかすら理解できぬままミルレアを保護した。

「ミルレアお嬢様の御両親は、自らに保険を掛けておられました。警察だったお父様はこうなる事を予期していたのではないでしょうか」

饒舌なディーラーの声音は、しかし暗い。

ミルレアはすでに口を固く閉ざし、俯いていた。

時折その肩が小さく上下するのは、泣いているからだろう。

家族を失う苦痛。

血は繋がっていなかったが、主と従者という関係ではあったが、レミリアと咲夜は確かに家族だった。

――……

ミルレアに掛ける言葉が見つからず、レミリアはついに口を閉ざしてしまった。
その後、泣き疲れたミルレアを寝室に寝かし、ディーラーは居間で紅茶をレミリアに振る舞っていた。

「美味しいわ……」

「ありがとうございます」

素直な感想がレミリアから漏れた。
ディーラーは軽く頭を下げ、自身もソファに腰掛ける。

日が暮れ始め、柔らかな橙色の光が窓から射し込んでいる。
レミリアはそれに触れぬよう、部屋の奥に座っていた。

「ディーラーって名前、どうしたの？」

「私は夜間、カジノでディーラーとして働いているんですよ。トランプゲームが得意でして。それで、そのまま呼び名として使っています」

「へぇ……嫌いじゃないわよ。その名前」

ディーラーが口の端に柔らかな笑みを浮かべた。

「トランプ……ね。ねぇディーラー、私と勝負しない？」

「え？」

レミリアが懐からトランプを取り出した。
咲夜の愛用していた、古いトランプだ。
レミリアは素早くシャッフルし、上から五枚を机の上に伏せた。

「ポーカーよ」

表返すと各絵柄の４のカードが４枚とスペードのエース。
フォー・オブ・アカインドの役を揃えていた。

「チップは無し、乗るか降りるかの一回勝負。親はあげるわ？」

「ふふ、手加減しませんよ？」

ディーラーが手慣れた動作でカードを切る。
カットとシャッフルを繰り返し、二人にカードが配られた。

「私は二枚カードをチェンジします……痛っ」

「ちょ、大丈夫？」

カードの端で指を切ったらしい。
ディーラーの白い指に赤い点が小さく浮いていた。

「貸しなさい」

「え？」

レミリアがディーラーの指を口に含む。
滲む血液がレミリアの口内に広がるのが分かる。

――懐かしい味ね……

咲夜の血もよく飲んでいた。流す血のほとんどは鼻からだったが。

――思い出すんじゃなかったわ！

「ぁ……あの、レミリアさん」

見れば、ディーラーが困った表情で頬を赤らめている。
考えてもみれば、年上の女性に指を舐められているのだ。

それは同性でも恥ずかしい。

「血は止まったわ。一応、傷が開かないように絆創膏だけはしときなさい」

「あ、はい」

ディーラーはすぐに人差し指に絆創膏を貼ると、再びトランプを持つ。

「私のチェンジは終了です。この手札ならば戦えます」

「私は……そうね、五枚全部変えるわ」

「え？」

ディーラーが驚きの表情を浮かべる。
しかし、すぐに平静を取り繕い、カードを配り始める。

「ディーラー、貴女トランプが得意って言ったけど、ポーカーの勝率は？」

「１００パーセント。ポーカーに限らずトランプで負けた事はございません」

少しばかし得意気に、しかし決して漫然とはしない笑みを浮かべたまま、最後のカードをレミリアに配り終えた。

伏せたカードを見て、レミリアが密かに、ディーラーですら気付かない微笑を口許に浮かべた。

「では、カードを確認し――」

「――コール」

ディーラーが呆然とする。
レミリアは、配られたカードを確認すらしていないのだ。

「聞こえなかったのかしらディーラー？　コールよ。私はこの手札で勝負するわ」

「……分かりました。では私もコール。その勝負乗ります」

ディーラーの手札には、スペードのエース４枚のフォー・オブ・アカインドが揃っている。

「ねぇディーラー……」

レミリアが不敵な笑みで、カードをめくってゆく。
一枚目はクラブのクイーン。

ディーラーがイカサマを仕掛けた事は、レミリアも承知している。
いや、あえてそうさせるように仕向けたのだ。

「貴女……」

「――え？」

二枚目はダイヤのクイーン。
配った記憶のないカードに、ディーラーから短い言葉が漏れる。
レミリアに、ワンペアが揃った。

「一度……」

スペードのクイーンが姿を見せる。
スリー・カードが完成した。

「知ってみると良いわ」

ダイヤのクイーンの出現と共に、スリー・カードがフォー・オブ・アカインドへと昇華する。

「まさか……」

レミリアの指がゆっくりとカードを持ち上げる。
ディーラーが息を飲み、カードをひたすらに凝視する。

時が止まるような錯覚が、ディーラーを襲う。

現れたカードは……ジョーカーだった。

「運命に敗北する気分を」

レミリアの役はファイブ・オブ・アカインド。
ロイヤルに匹敵する最強クラスの役だ。

「どうやって……」

「理由なんてないわよ。必然が偶然に変わっただけ……」

純粋な敗北だった。
絆創膏で手元が狂った事にディーラーが気付いたのは、レミリアがそれを指差した時だ。

気付いてなお、ディーラーは信じられない様子だ。

「楽しかったわディーラー。また勝負しましょう」

ディーラーが何か言うよりも早く、レミリアは部屋を出た。

日は完全に暮れ、辺りには夜の帳が降りている。
レミリアは外気に立ち込める霧を睨む。殺意の奔流を隠し持つ、深い霧を。

「また勝負しましょう？　殺人姫……」

無題ー332ed

相変わらず霧の深い街並みだ。
足元を照らすべき街灯の光すら、白いベールに遮られて役目を果たさない。

白と薄い光、それに静寂が支配する景色に、しかしそこには文面通りの荘厳さは無く、あるのは獣の如き殺意の奔流だけだ。
街を一望できる場所、時計台の頂上からレミリアは街を見渡していた。

霧が深くてよくは見えないが、それでも何か動いているものくらいは見える。
動く気配と、影からレミリアはそれを探していた。

紅色の瞳が、辺りを見渡し続ける。

殺人姫。

この街に突如として現れ、猟奇殺人を繰り返す切り裂きジャックの正体だ。
そして彼女こそ、レミリアがこの場に現れた理由でもある。

――昼間のディーラーが演技をしていたようには見えなかったわ……

倒れたレミリアを助けた少女、ミルレア。

そのミルレアに仕えるメイドであるディーラーと殺人姫、そして十六夜咲夜は同一人物としか思えない顔をしている。

顔だけではない。

声音も、内に湛える雰囲気も……全てがレミリアには苦痛だった。

「……見つけたッ！」

赤い双眸が一点を捉える。
人間の視力では、到底認識できない距離だ。

暗い月夜に、レミリアは両翼を広げる。
猛々しく、そして優雅に。
時計台の屋根を軽く蹴り、重力に身を任せる。

まとわりつくような夜霧さえもレミリアには追い付かず、疾風と

化した彼女は風すらも置き去る。
今ならば、あの鴉天狗にも勝てるかもしれない。
やがて地面に足を着き、遅れて風が髪を撫でた。

「こんばんは、咲夜」

「あら、吸血鬼の御嬢様ではありませんか」

レミリアと殺人姫、それぞれがお互いに挑発的な呼び名を使う。
二人を包む白い霧は、ぼんやりとだが紅と黒に染まってゆく。

無言の殺劇。

覇気と殺気がお互いを飲み込もうと、混じり合う。

「……ディーラーという女性をご存知かしら？」

まず、レミリアが口を開いた。
返事の内容には興味がなかった。そうではなく、問いかけに対する殺人姫の反応を見る。

「無粋な方ですね。私と言う者がありながら、この場で別の女性の話をなさるなんて」

鼻先に嘲笑を浮かべ、殺人姫は舞台役者のように辺りを歩む。

――分からない……

殺人姫の思考は本当に読めない。
感情の起伏を忘れたように、全てが平淡に見えて。

全てが芝居。

世界は舞台で主演は彼女
。
虚偽と濃霧の演目は、果たしてどのように幕を閉じるのか。
彼女は、どのような台本を演じているのだろうか。

「咲夜、ディーラー、どっちでも良いわ……貴女は殺人姫なんかじゃない」

変わり果てた、思い出を全て否定するような、目の前の女性に、レミリアは乞うように告げる。

「貴女は、誰かに尽くして殺しすらいとわなくとも、殺しを楽しむような人間じゃない！」

「……御嬢様……」

消え入るような小さな声で、しかし確かに、殺人姫の口からはそう聞こえた。

「咲夜！」

「――戯れ言ね」

「！？」

赤い瞳を細め、蔑むようにレミリアを見下す。

「その二人が誰かは知らないけれど、私は私。吸血鬼ごときに理解を求めるつもりもないわ」

「……そう。もう良いわ」

レミリアを包む覇気が、色を濃くする。
憤怒を体現するかのような赤い霧が、殺意を孕む黒い霧を飲み込んで行く。

「知らないのなら叩き込んであげる。忘れたのなら二度と忘れられないように刻み込んであげる」

紅霧の中、レミリアが巨大な翼を広げた。

「貴女の主が誰なのかを……！」

霧が、動いた。

空気の流れができるよりも早く、レミリアが超低空を駆ける。
遅れて発生した乱気流は、赤い霧の姿をねじ曲げ、無数の腕のように殺人姫に雪崩れ込む。

咆哮の如きレミリアの暴力的なスピードに対し、殺人姫は水面に舞う黒蝶のような脚捌きで優美に回避する。
回避の動作から一転、懐から取り出したナイフをレミリアへ向けた。

「それを下げなさい……咲夜！」

「――ッ！？」

レミリアの飛翔により巻き起こされた暴風は、霧を携えて赤い蛇と化し、産み出された赤い蛇は殺人姫を容赦無く呑み込んだ。

「……何とか逃れたみたいね？」

「腕をもがれるかと思いましたわ……」

背後に立つ殺人姫に、レミリアは振り向く事もせずに声を掛けた。時間停止が間一髪で間に合った殺人姫だったが、コートの右肩から先が無くなっている。

レミリアは飛翔の際に、地面を僅かに砕いていた。風と霧に忍ばされた岩片は、速度によって破壊力を授かり、真空波の如き刃となって襲い掛かったのだ。

「でも、止まった時間の中でなら速度は関係なくてよ？」

刹那、いやその間隔すら存在しない。

まさにその瞬間だ。

レミリアの視界いっぱいにナイフが姿を現した。
その全てが、瞬きする間も無いままに飛来する。

「舞台の踊り子には、触れないのがマナーよ」

レミリアはその場でドレスを披露するようにクルリと回る。
その動作に引かれた翼は、盾となってナイフを叩き落とした。

「ほら」

「――え？」

殺人姫の頬を、何かが掠めた。
次の瞬間、殺人姫の背後にあった壁に、銀のナイフが深々と刺さった。

レミリアは身を守る動作の中、一本だけナイフを通し、それを掴

んでいた。
翼から姿を現すと同時に投合し、今の結果を生んだのだった。
「従者が主に勝てる訳がないじゃない」
「まだよ！」
殺人姫はどこから取り出したのか、無数のナイフを投合してくる。
時間の停止を仕込み、速度も密度もバラバラな弾幕。
それはかつて、十六夜咲夜の使ったスペル【奇術　エターナル・ミーク】そのものだった。
「懐かしいわね」
対し、レミリアは足下に散乱したナイフを突風で巻き上げる。
「ハアアアアッ！！！」
その全てを超高速で殴りつける。
レミリアの殴ったナイフは殺人姫の投げたナイフにぶつかり、そのことごとくを地面へ叩き伏せた。

「さあ、咲夜。再び私の前に跪きなさい」

「……うっ！」

ナイフの波と共に飛来したレミリアは、殺人姫の首元に牙を埋めた。

吸血鬼の口付け。

体の力を根こそぎ奪われ、殺人姫の膝がぐらつき始めた。

「……っ！」

ナイフをレミリアに埋めるも、浅い。
しかし牙を離す事はできた。

「……はぁ……っはぁ」

「美味しかったわよ？」

色っぽく唇を舐め、レミリアは蕩けたような視線を殺人姫へ送る。
一方の殺人姫は、立っているのも厳しいのか、肩で息をしながら地面へ膝を付いた。

「……ま、またお会いしましょう……吸血鬼の御嬢さん……」

レミリアが瞬きをすると、そこにはも殺人姫の姿は無かった。

「ええ」

再び唇を舐める。
今飲んだ血と、昼間に飲んだ血の味を忘れないように。
霧の中、レミリアは小さく呟く。

「また会いましょう……ディーラー……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2635z/

夜霧ノ幻影殺人姫

2011年12月17日10時45分発行